

分科会報告：高等学校・大学の部（テーマ1）：  
多言語教育推進のための制度やシステムづくり・活用

水口 景子

高等学校・大学の部の第1分科会では、テーマを「多言語教育推進のための制度やシステムづくり・活用」として、JET プログラムにおける多言語推進の取り組み、第4回に続いて東京都立高等学校における英語以外の外国語必修化構想、大学入試における多言語入試への取り組み、ダブルメジャーをめざすプログラムに関する具体的な事例報告が行われた。以下にそれぞれの発表の骨子と質疑応答を報告する。

1. 「JET プログラム—多言語推進の取り組み—」

発表者：柏井孝太郎（一般財団法人自治体国際化協会）

JET プログラム（正式名称を「語学指導等を行う外国青年招致事業」）の概要やALT プログラムの特徴、多言語教育を展開している学校での活用例を紹介した後、地方交付税措置などJETの任用促進のための説明が行われた。

JET プログラムの概要

・JET プログラムは、外国から国際交流に意欲のある青年を招致して、学校や自治体で数年間働いてもらうというもので、2015年で30周年を迎えた。これまで世界65カ国から累計約65,000人を招致する世界最大規模の人的交流プログラムであり、英語圏からだけでなく、非英語圏からの外国青年も招致している。平成28年度現在、JET参加者は約5,000人、全ての都道府県で活躍している。招致国の内訳を見ると、9割以上が英語圏からの参加者。非英語圏は221人。

・職務内容は、JETの約9割を占める教育委員会や学校で外国語教員の助手として働くALTのほか、主に主に県庁や市役所、町役場などで翻訳や通訳、イベント企画、国際理解講座の運営を担うCIR（Coordinator for International Relationsの略で国際交流員）、強豪校の部活動指導や少年団の指導、指導者の育成を担当するSEA（Sports Exchange Advisorの略でスポーツ国際交流員）がある。

ALT プログラムの特徴とメリット

・常勤であるため、チームティーチング（TT）、外国語教材の作成と提供、給食、

掃除、サークル活動など授業以外の時間も生きた英語に触れる機会も提供可能。また、学校生活以外にもボランティア活動、国際交流イベントにも積極的に参加することから、地域の社会との顔の見える関わりもつくることができる。

#### 多言語教育における活用例

多くのフランス人 ALT は、母国語であるフランス語を教えるだけでなく、英語も教えることができるため、学校の要望に応じてフランス語と英語の両方を教えることがある。多言語教育を展開している埼玉県立伊奈学園総合高等学校では、週 18 時間あるフランス語とドイツ語の半分は ALT との TT による授業を実施。

本発表に関する質疑応答は以下のとおり。

ALT がどの都道府県のどの高校で教えているか、情報公開できるかという質問に対しては、都道府県で何名かであれば教えられる。どの学校に何人いるかは教えられないとの回答があった。ALT の出身地域(英語圏と非英語圏)による倍率については、英語圏は 3 倍、非英語圏の ALT については、要望があることを前提に招聘することであった。また、ALT、CIR の条件については、ALT は日本語、英語が実用レベルであること。CIR は日本語能力試験 N2 以上としているとのこと。業者を通した ALT の招聘についての質問に対しては、いわゆる外国語指導助手は、必ずしも JET プログラムで招聘された人だけではないと回答があった。

## 2. 「王子総合高等学校の英語以外の外国語必修化構想(案)」

発表者: 宮嶋淳一(東京都立王子総合高等学校)

平成 23 年度開校 全日制・総合学科で 5 つの系列を有する同校は、平成 30 年度から教育課程を改定し、英語以外の外国語を必修化する構想をたてている。これまで表現力やコミュニケーション能力の向上や AO や推薦入試での大学進学実績を出してはいるが、グローバル人材育成等の様々な教育課題への対応や大学の一般入試に対応し得る学力の育成が課題であると認識している。

平成 27 年度から、「王総将来構想プロジェクト」として、これまでの教育課程の成果や課題についてのフリートーキングを開始し、平成 28 年度には王総プラン「王総・三位一体改革」として新たな教育課程案を策定した。

新たな教育課程の主旨は、各系列の想定進路との関連を明確化、選択科目の配置の見直し、グローバル人材育成を推進、四年制大学への進学に対応そして、次期学習指導要領改訂の趣旨や東京都教育施策大綱等を反映させることにあった。

外国語の科目に関する特色(案)としては、英語以外に設置する言語として、フランス語、スペイン語、中国語、韓国・朝鮮語などを2～4言語を2年次に週2時間、1言語を必修選択とする、王子グローバルランゲージ構想を考えた。この改革では、英語を学ぶ意味をアメリカやイギリスの人々と交流するため⇒アジアやアフリカ、大洋州など様々な国や地域で英語を話す人々と交流するためと位置付けたうえで、さらに、世界中の様々な国や地域の人々と出会い、共に笑い、競い合い、学び合い、互いの文化を尊重し合い、協力して物事を成し遂げるグローバル人材育成のために、英語以外の外国語を必修化する構想を描いた。

王総グローバルランゲージ構想の仕掛けとしては、1年次週2時間「産業社会と人間」の授業で自分の適性等を知り、職業を調べ、生き方在り方を探求してライフプランを作成し、2年次以降の科目選択を検討し、その中で、自分の将来の夢を考え、活躍するフィールドを想定し外国語の科目を選択することになっている。

各言語の講師の確保や英語以外の外国語を必修化する意義についての理解啓発という課題はあるが、実現に向けて一歩ずつ進んでいきたいと考えている。

本発表に関しては、講師確保という課題についてのやりとりが複数行われた。東京都の場合、英語以外の外国語に限らず講師名簿というのがある。たとえばスペイン語で名簿に登録されているのは2名のみで、他の学校との兼任や居住地などの関係で確保が難しい状況であることや、中国語や韓国語については講師確保に苦勞がないのではというコメントに対しては、大学で免許を取得しても必ずしも仕事につながらないなど、教員課程を有する大学と高校とのネットワークの必要があることを会場から指摘された。

### 3. 「多言語入試への取り組みー立命館大学文学部 AO 入試国際方式に関する報告」

発表者：竹村はるみ(立命館大学文学部)

多言語入試に取り組んだ背景には、AO入試の面接の中で、英語圏への留学経験をアピールする学生に加えて、英語以外の言語に関する学習意欲や異文化体験をアピールする学生が増えていることや、グローバル化と政府や企業も含めて社会のグローバル人材への期待があるなかで、大学と高校が連携を強めることで、国際的視野をもった学生を継続して育てる息の長い教育を行うことができるとういう考えがある。

文学部の AO 入試では、2016 年度から国際方式(中国語・朝鮮語／キャンパスアジア)を、2017 年度入試からは、国際方式(英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語)、国際方式(デュアル・ディグリー・プログラム)を取り入れた。AO 入試には、一般入試では測れない多面的・総合的評価で多様な学生を選抜できるメリットがある一方で、求める学生像が必ずしも明確に打ち出せておらず、学生の側も学力試験を課されていないため、入学後に大学の授業についていけないというデメリットがある。

教員と職員が 2 人 1 組で多言語教育に力を入れている高校を訪問したり、高校の教員を対象した説明会の開催、JACTFL の大会での発表などで広報を行ってきた結果、志願者数が大幅アップした。入学後の学生たちを見ていると、ひとつ(外国語)に秀でた生徒は、他の科目についても高いスコアを残している。AO 入試で入学した生徒の成績が高い。

また、立命館大学文学部では、英語以外にも多様な言語や文化・歴史にかかわる教育・研究のリソースが充実している特異性のある学部であり、外国語科目も英語・ドイツ語・フランス語・中国語・スペイン語・朝鮮語・イタリア語の 7 言語を開講している。また、文学部独自の豊富な国際教育プログラムとして、キャンパスアジア・プログラム、エリアスタディ、DUDP 等を用意している。

最後に、多言語志向の学生に望むこととして、学びへの情熱、新たな分野に挑む積極性、学びの方向性を見極めるヴィジョン形成力、理想に向けて行動する目標実現力が挙げられた。

本発表に関する質疑応答は以下のとおり。

AO 入試の条件として課されている資格試験の要件が簡単すぎるのではないかというコメントに対しては、多言語入試の学生に望むことは「人物主義」。大学に入って何をしたいのかそのビジョンを明確にたてられているかを面接で確認するとの回答があった。

多言語入試で入学した生徒の留学については、キャンパスアジアは中国と韓国の両方に留学することが制度化されているが、多言語の場合は、留学は特に保証されているわけではないとの説明があった。また、当該言語の未修者が高校での既修者を追い越すこともあるのではないかとの質問に対しては、その可能性はあるとの回答があった。

#### 4. 「東海大学の『特定プログラム』制度」

発表者：惟村宣明(東海大学国際教育センター)

東海大学では 2013 年度より、ダブルメジャーを目指す「特定プログラム」制度が発足した。この制度を活用し、授業の中で「高度なフランス語で自らの考えを発信する能力」を培うためプログラムを構築した。

この「特定プログラム」制度では、書類選考と面接試験を受けて認可された学生が受講できる「プレゼンテーション上級」(週 2 回開講、春学期・秋学期合計 8 単位)と「修了ゼミ」(週 1 回開講春学期・秋学期合計 4 単位)を含む、国際教育センター開講の当該言語科目 40 単位を修了する必要がある。「修了ゼミ」と「プレゼンテーション上級」の授業では、それぞれの言語で書かれたエッセーあるいは論文を発表し、提出しなければならない。

特定プログラムでフランス語で表現する・発信する・話し合うことをめざし、さまざまな活動を行っている。たとえば、学内・学外のフランス語コンテストに挑戦、DELFB1, B2 / 仏検 2 級 など資格試験への挑戦や映画を製作し YouTube にアップするなどである。

特定プログラム履修者は、フランス語コンテストで好成績をあげ、仏検 2 級と DELFB1 の合格者は急増し、B2 の取得者も輩出するようになるなど、成果をあげている。

単に学習者の語学力が向上したことを喜ぶのではなく、東海大学のフランス語教育がめざしたいのは、フランス語の鍛錬を通じて、国際的視野に立つ、人格、教養ともに優れた人間の育成である。

本発表についての質疑応答は以下のとおり。

40 単位すべて履修の認定はどのようなかたちで行われるのかという質問に対しては、認定書がでるとの回答が、また、特別プログラムの目標設定は各言語共通かという質問については、フランス語は独自に高い級を設定している。学生は試練を与えれば乗り越えるというのが実感との回答があった。

(国際文化フォーラム)